



# 第79回国民体育大会 滋賀県開催準備委員会

## 子ども・若者参画特別委員会 (ジュニア・ユースチーム)

# 活動報告書

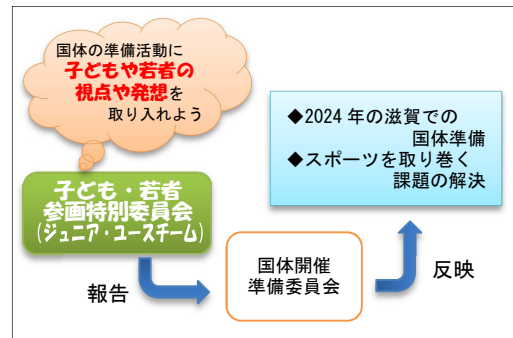
(平成26年7月24日～平成27年3月7日)



## はじめに（ジュニア・ユースチームについて）

### ◎設置趣旨

平成 36 年（2024 年）に第 79 回国民体育大会（国体）を本県で開催するに当たり、子どもや若者の視点や考えを国体準備や県のスポーツ振興に反映させることを目的に、国体開催準備委員会のもとに「子ども・若者参画特別委員会（通称：ジュニア・ユースチーム）」を設置した。



滋賀ならではの取組

### ◎活動内容

国体開催準備や県のスポーツ振興に関する事項の中からテーマを設定し、必要な調査・体験活動を行い、意見をまとめ、翌年度に開催される国体開催準備委員会に報告する。

今年度は「湖上スポーツ」をテーマとし、湖上スポーツを取り巻く環境を調査するとともに、ボート、カヌー、ヨットの乗艇体験することによって、湖上スポーツの普及や魅力発信につながる取組等の検討を行った。

回	内容	活動日
1	結団式、仲間づくり活動	7/24
2	調査・体験活動① ボート	8/3
3	調査・体験活動② カヌー	8/24
4	調査・体験活動③ ヨット	9/7
5	講話、調査結果の整理	10/26
6	課題解決に向けたアイデア出し	1/18
7	活動報告会資料づくり	2/7
8	活動報告会、解団式	3/7

### ◎委員募集

県内に居住、通学・通勤する小学 4 年生から大学生世代の子ども・若者を募集した。

今年度は小学 5 年生から大学 4 年生、23 名が活動した。

(p.12 の第 1 期生メンバー参照)

	小学生	中学生	高校生	大学生	計
男子	3人	3人	4人	3人	13人
女子	3人	3人	1人	3人	10人
計	6人	6人	5人	6人	23人



募集チラシ

## 結団式・仲間づくり活動

(平成 26 年 7 月 24 日)

会場：びわこ成蹊スポーツ大学（大津市）

### ◎結団式

結団式では国体準備室木村室長より「滋賀県の子ども・若者の代表です。その気持ちを忘れず、元気に楽しく活動してください。」と激励があり、その後「子ども・若者参画特別委員会委員」の委嘱状が授与された。



委嘱状の授与

### ◎仲間づくり活動

結団式のあとは、交流を深めようということで仲間づくり活動を行った。この仲間づくり活動は、1人では解決できない課題を協力して解決していくという活動で、体を支え合ったり、アイデアを出し合ったりしないと解決できない課題ばかりだった。小学生から大学生までと年齢の幅が大きい集団だったが、みんなが協力しながら楽しく活動できた。



仲間づくり活動

### ◎取材内容の検討

仲間づくり活動のあとは、国体についての説明を聞いた。国体が滋賀県で開催されることも滋賀県での開催が2回目であることもこの時初めて知った。

そのあと、グループに分かれ、次の活動で行うインタビュー内容を考えた。



取材内容の検討

## ボート調査・体験活動

(平成 26 年 8 月 3 日)

会場：県立琵琶湖漕艇場（大津市）

### ◎インタビュー調査

この施設で練習する選手やコーチ、施設の方々にボート競技の魅力や課題などについて、インタビューを行った。インタビューをするのは初めてで緊張したが、たくさんの人から話を聞くことができた。

漕艇場では、小学生から中学、高校、大学、社会人の方までたくさんの方々が練習されており、大変活気があった。8人の小学生に取材したときには、全員が「ボートが楽しい、いやになったことは一度もない」と答えてくれたのがとても印象的だった。



選手へのインタビュー



小学生を指導されているコーチの方からは「頑張って練習してきた選手が中学生になると、ボート部がないため、他の競技に移ってしまうこともあり、さみしい思いもある」という話もあった。ボートが楽しいと言っている小学生たちが、中学生になっても大好きな競技を続けられるような環境整備が必要だと感じた。



小学生選手へのインタビュー

### ◎ボート乗艇体験

取材の後は、4人乗りのボートを体験した。風を切って進む感覚はとても爽快で、ボートをやったことのある人にしかわからないという「独特の風」をほんの少しだけ感じることができたような気がした。

また、ボートから見る景色は普段見ている景色とは全然違い、これも魅力の1つだと感じた。



ボート体験の様子

## カヌー調査・体験活動

(平成26年8月24日)

会場：能登川水車とカヌーランド（東近江市）

### ◎カヌー乗艇体験

能登川総合スポーツクラブのご協力のもと、大津高校、八幡商業高校、八日市南高校のカヌー部の皆さんに教えていただいた。初めは水にはまってしまうかと心配していたが、底の平たい初心者用のカヌーは意外と簡単に乗れて、とても楽しめた。競技用のカナディアンカヌーに挑戦するメンバーもいたが、乗るのがなかなか難しく、挑戦したメンバーは全員、水に落ちていた。この不安定なカヌーでレースを行う選手のバランス感覚はすごいなと改めて思った。



高校カヌー部員による指導

### ◎インタビュー調査

カヌー体験のあとは、選手やコーチの方々にカヌー競技の魅力や課題について、取材を行った。インタビューも2度目ということで少し慣れ、積極的に取材することができた。

カヌーでは高校から始めたという人がほとんどだった。「競技人口が少ないから表彰されやすい」という意外な答えもあったが、本音はカヌーのことをたくさんの人に知ってほしいし、カヌーする仲間が増えてほしいと思っているのだと取材をしていて感じた。



カヌー体験の様子



指導者へのインタビュー

会場：県立柳が崎ヨットハーバー（大津市）

## ◎ヨット講習会

まずは、琵琶湖ジュニアヨットクラブの小・中学生の練習の様子を湖上から見学した。小学生や中学生が一人で上手に操作しているのを見てとても驚いた。

そのあと、教室でヨットが進む原理を習った。風に向かって進むこともできることをはじめて知った。ジグザグに進むことで、風に向かって進むことができるということだが、風も同じ方向から吹き続けてくれないので、ヨットに乗る人の技術はすごいなと思った。

ヨットの原理を習ったあとは、陸上でヨットの操作法を教えてもらった。いざやってみると、見た目以上に難しく、指示どおりにはなかなか動けなかった。



湖上からの練習見学



陸上での操作練習

## ◎ヨット乗艇体験

午後からは実際にヨットに挑戦した。風も適度にある絶好のコンディションだった。景色も最高で、風の力が感じられ、自然に溶け込むようで、今までにない感覚を味わうことができた。



ヨット体験の様子

会場：滋賀県婦人会館（近江八幡市）

## ◎現役アスリートによる講話

カヌーの国体滋賀県代表選手である同志社大学の坂田真選手に、高校から始めたカヌーで日本のトップレベルまで成長できた理由やカヌー競技の魅力・現状などについて話をしていただいた。

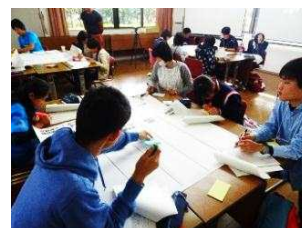
日本では高校からカヌーを始める選手が多いが、海外では小さい頃からカヌーを始めており、非常に強いという。日本一の琵琶湖をもつ滋賀県から世界に通用する選手を生み出すためには、小さい頃からカヌーに親しむことができる環境が必要だと感じた。



現役国体選手による講話

## ◎調査結果の整理

講話のあとは、インタビューしてきた結果を付箋に書き出し、種類ごとに分けて次のとおり整理した。



取材結果を付箋で整理

### 1. 競技との出会い

**中学・高校から  
競技をスタート**

競技を始めたきっかけは、家族の影響、体験教室への参加、先生や先輩からの勧誘などで、多くの人が中学、高校で競技を始めていくことがわかった。

### 2. 競技の魅力

**自然との  
ふれあい**

競技の魅力については、湖上から見る景色について答える人が多く、特に夕日の中で漕ぐのはとても気持ちがよく、自然との一体感を感じられるということだった。また、自然が相手で毎回、風や天気などの条件が変わるところが魅力と答える人もいた。

### 3. 競技レベルや目標

**全国レベルで  
活躍中**

どの競技も最近、県のレベルが上がってきているようで、「全国大会で優勝することが目標」という選手やコーチもいた。

### 4. 競技の適性

**努力次第で  
誰にでもチャンス**

ボート…呼吸を合わせる必要があるので思いやりのある人  
カヌー…手足が長く、バランス感覚のある人、  
冒険心が強い人

ヨット…風など環境の変化に対する観察力や分析力のある人

いずれの競技も中学生や高校生から始める人が多く、努力次第で誰にでも活躍できるチャンスがあるということだった。

### 5. 競技環境（琵琶湖）

**恵まれた環境  
をさらに活かす**

潮の満ち引きのある海と違って水位が安定しているという点や、海だと船についた潮を洗い落とす必要があるが、琵琶湖ではその必要がないなどの利点があげられた。また、他県では滋賀県に比べ水上スポーツを行う時の規則が厳しいそうだが、そういった点からも琵琶湖は恵まれた環境であるということだった。

一方で、夏場に藻が大量に発生し、オールやパドルに引っかかったり、船底に藻が絡みヨットが出せなかったりして、練習や試合に大きな影響を及ぼした。不要な藻は取るなどしながら、琵琶湖という恵まれた環境を活かしていかなければならないと感じた。

## 6. 指導者

**競技歴のない  
指導者も多い**

元々はボート選手だがカヌーの指導をしているコーチもいた。選手からそのまま指導者になっている方ばかりだと思っていたが、競技歴のない指導者もいることを聞いてとても意外に思った。

また、常に生命を大切に考えて指導することや、湖に船が出ると指導する範囲が1 km以上になり、一緒に船に乗って手取り足取りで指導することができないので、選手に考えさせて、自分にあった動きを見つけさせるのが難しいということだった。

**リーダーとなる  
選手を育成**

さらに、指導者が湖上に一緒に出られない分、湖上でコーチの代わりができるようなリーダーを育てることが大切だということだった。選手のインタビューの受け答えがどの競技においてもしっかりしていたのは、こうした普段の練習姿勢があるからだと感じた。

## 7. 用具

**用具は高額で  
不足気味**

用具の値段は、1人乗りカヌーで50万円、4人乗りのボートで200万円、パドルやオールは5万円など、どれも大変高価なものばかりだった。また、どの施設においても人数の割に船が少ないという状況があった。

## 8. 困っていることや要望

**競技人口が  
少ない**

競技者、指導者が少なくて困っているという声が多くあった。また、練習や試合で使用する船が少なく、しかも高価であり簡単に揃えられないことや、小さい頃から練習できる環境が少ないことなど、競技環境をもっと整備してほしいという声もあった。

**湖上スポーツの  
魅力発信**

さらに、練習や試合会場となる水辺にもっと来てほしい、施設を利用して楽しさを知ってほしいなど、湖上スポーツの魅力を多くの人に知ってもらいたいという声も多く聞かれた。

### ◎湖上スポーツに対する「思いや願い」

取材等でわかったことを踏まえて、「これから湖上スポーツにこうなってほしい」という「思いや願い」を出し合った。そして、メンバーから出されたたくさんの「思いや願い」を次のとおり大きく4つにまとめた。



「思いや願い」を整理



### 1. 競技環境としての琵琶湖をきれいにしたい

湖上スポーツを体験したどの施設においても、競技環境である琵琶湖のことを気にかける姿があった。特に昨夏は藻が大量発生し、練習や試合に大きく影響した。

調査結果より

- ・ 競技環境である琵琶湖を気にかける姿
- ・ 藻の大量発生で練習や試合に大きく影響

思いや願い①

競技環境(琵琶湖)をきれいにしたい

### 2. 湖上スポーツの競技者や指導者が増えてほしい

取材の中で、選手、コーチが口を揃えて訴えたのが競技人口の少なさについてだった。また、指導者も選手も増えればもっと競争が激しくなり、強くなると思った。

調査結果より

- ・ 競技人口の少なさ
- ・ 増加すれば競争が激しくなり強くなる

思いや願い②

湖上スポーツの競技者や指導者が増えてほしい

### 3. 湖上スポーツの魅力を知ってもらいたい

今回ほとんどのメンバーが初めて湖上スポーツを体験した。滋賀県に住んでいながら、湖上スポーツの体験ができることも知らなかった。体験してみて、ボート、ヨット、カヌーそれぞれに違った魅力があることを知り、こうした魅力をもっと多くの人に知ってもらいたいと思った。

調査結果より

- ・ 初めての湖上スポーツ体験でそれぞれに違った魅力に出会う

思いや願い③

湖上スポーツの魅力を知ってもらいたい

### 4. 湖上スポーツを気軽に体験したい

体験活動を終えた多くのメンバーが「また機会があればやってみたい」と答えた。しかし、バドミントンやサッカーなどのスポーツに比べると学校や地域で体験できる機会は少ないと思った。

調査結果より

- ・ また湖上スポーツをやってみたいが、体験できる機会が少ない

思いや願い④

湖上スポーツを気軽に体験したい

## 課題解決に向けたアイデア出し

(平成 27 年 1 月 18 日)

会場：滋賀県庁（大津市）

### ◎マインドマップでアイデア出し

まとめた4つの「思いや願い」を実現するためには、どんなことができるのか、みんなでアイデア出し合った。

びわこ成蹊スポーツ大学の豊田 則成先生にお越しいただき、マインドマップ\*という手法を教えてもらった。マインドマップの描き方を学び、自分の作ったマインドマップを説明する練習をしたあと、設定した4つの「思いや願い」について、マインドマップを作成した。そして、でき



マインドマップの作成



たマインドマップを見ながら、アイデアを出し合い、意見をまとめた。

\*マインドマップとは、中心となるキーワードから関連する言葉やイメージをつないで図として描き出すことによって、記憶の整理や発想をしやすい思考表現方法。



マップをヒントにアイデア発表

## 報告会の資料づくり

(平成 27 年 2 月 7 日)

会場：滋賀県庁（大津市）

報告する資料の確認・修正を行い、アイデアの最終形をマインドマップにまとめた。



提言内容の検討



プレゼン内容の検討



提言内容をマップで整理

## 活動報告会・解団式

(平成 27 年 3 月 7 日)

会場：コラボしが21（大津市）

### ◎活動報告会

湖上スポーツについての調査・体験活動より明らかになった魅力や課題などを整理して、湖上スポーツの活性化に向けた意見を発表した。会場には三日月大造知事をはじめ、50名余りの皆さんにお越しいただいた。



意見を発表する委員

### ◎課題解決のための提言

湖上スポーツに対する「思いや願い」の実現に向け、課題となる事項を解決するための提言をした。

#### 1. 競技環境としての琵琶湖をきれいにするための提言

##### (1) ごみ・生活排水を削減

競技の舞台である「琵琶湖」をきれいにするということについては、ごみや水質を悪化させる生活排水を減らすために、ポイ捨ての取締りを強化したり、水質を守るための条例を強化したりすることができないかと考えた。


(2) 藻の有効活用と外来種の削減

今回、湖上スポーツ関係者が「藻」で大変困っていた。藻や水草を除去するだけでなく、バイオエタノールとしての資源化や藻の食用化などの研究の推進することも有効だと考える。

さらに、琵琶湖を本来の姿に戻すことで琵琶湖への親しみが増し、湖上スポーツの魅力も増えるのではと考えた。そこで、外来種を減らし古来の生物を復活させるために、外来魚の釣り大会をもっと開催し、楽しみながら外来魚を減らすこともできると考えた。

**課題解決のための提言①**

- ◆ **ごみ・生活排水を削減**  
⇒ポイ捨ての取締り強化！条例強化！
- ◆ **外来種を減らし、古来からの生物を復活**  
⇒藻の除去、**資源化（バイオエタノール）**や**食用化**の研究  
⇒楽しんで外来魚を削減（**釣り大会**の開催）
- ◆ **琵琶湖をきれいにする活動への参加**  
⇒清掃活動の機会を増やす（季節ごと・学校行事で）  
⇒湖上スポーツ体験と**清掃活動とのコラボ**



(3) 琵琶湖の美化活動への参加

上記の取組に加えて、琵琶湖をきれいにする活動への参加をもっと増やしたいと考えた。「びわ湖の日」に行われている清掃活動を季節ごとに行うことによって、季節ごとの琵琶湖の魅力に気づくこともできるし、学校行事で琵琶湖の清掃に取り組むことも大事だと考えた。そして、清掃をするだけでなく、カヌーと清掃活動を組み合わせるなど、楽しみながら活動できるようにすればいいのではないかと考えた。

2. 競技者や指導者を増やすための提言


(1) 講習会や体験教室の開催

競技者や指導者を増やすことについては、経験者をまねいて、講習会や体験教室などを行うことを考えた。学校行事での体験活動や湖上スポーツができる部活動ができれば、競技者は増えると考えた。

また、滋賀県の小学生が必ず乗る「うみのこ」を通じて、ボートなどの体験をすることによって、湖上スポーツに興味をもってもらえると思う。

**課題解決のための提言②**

- ◆ **経験者をまねいて、講習会・体験教室を開く**  
⇒学校行事で体験教室、**運動部の設置**  
⇒「**うみのこ**」での体験活動
- ◆ **他のイベントとコラボして、体験者を増やす**  
⇒地域の祭、イナズマロックフェス等での体験  
⇒湖上スポーツの「**新キャラクター**」の設定



(2) イベントとのコラボレーション

イベントとコラボレーションして体験者を増やすことも考えた。県内各地で行われているお祭りや、夏に行われる「イナズマロックフェスティバル」などのイベントの機会にあわせて湖上スポーツを体験する機会を設けることで、多くの人に湖上スポーツの魅力をわかってもらうことができるのではないかと考える。

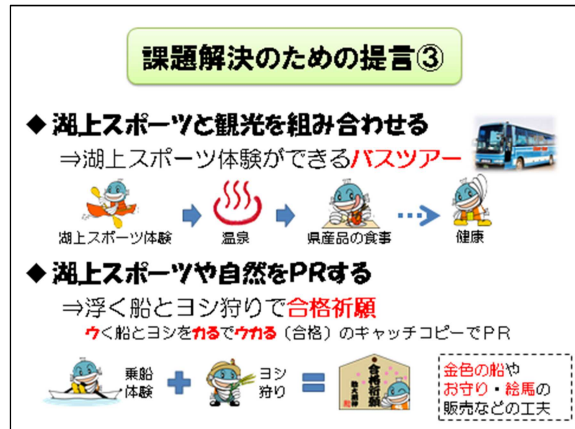
さらに「湖上スポーツのキャラクター」がいれば、もっと注目を集めることができ、盛り上がるのではないかと考える。

### 3. 湖上スポーツの魅力を知ってもらうための提言

#### (1) 観光との組合せ

湖上スポーツの魅力を知ってもらうためには、まず船に乗ってもらう必要がある。そこで、人を船に呼び寄せる方法として乗艇体験と観光を組み合わせることを考えた。

例えば、湖上スポーツ体験ができるバスツアーを企画し、湖上スポーツ体験を通じて、消費カロリーや運動の効果などを伝え、楽しく体を動かしてもらう。運動後は温泉に入ってもらい、県の特産品を中心とした食事を提供し、健康につなげてもらうというものである。



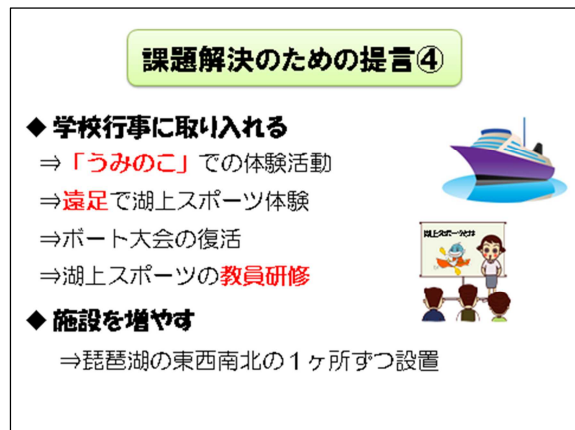
#### (2) 湖上スポーツと自然をPR

浮(ウ)く船とヨシを刈る(カル)で「ウ・カ・ル」ともじって、ボートやヨットやカヌーなどの船に乗って、琵琶湖のヨシを刈れば合格できるというキャッチコピーで、湖上スポーツと自然と一緒にPRして人を集めるというアイデアも考えた。船を金色にしたり、お守りや絵馬を販売するなど工夫することで、受験生が仲間と一緒に夏休みなどに来てくれるのではないかと考える。

### 4. 湖上スポーツを気軽に体験してもらうための提言

#### (1) 学校行事で湖上スポーツ

湖上スポーツを気軽に体験してもらうためには、学校行事を通じて体験することが一番だと考える。滋賀の特徴でもある「うみのこ」を通じての体験活動や、遠足に湖上スポーツを組み込むことができなだろうか。また、昔は高校で行われていたというボート大会の復活を求める意見もあった。



#### (2) 湖上スポーツの教員研修

さらに、学校行事で取り組むのであれば、先生がその魅力を知る必要があるということから湖上スポーツの教員研修を実施することも大切だという意見も出された。

#### (3) 施設の設置

やはり体験できる施設を増やすことも必要であり、琵琶湖の東西南北に体験できる施設の設置を求める意見も出された。

## ◎活動報告に対する知事の講評（抜粋）

ジュニア・ユースチームの皆さん、お疲れ様でした。よくぞ参加してくれました。まずは皆さんの取組に敬意を表したいと思いますし、その意欲を称えたいと思います。

一番若い人で小学5年生、一番年上の人で大学4年生までの人がいるということですが、まとまって発表まで結び付けてくれてありがとうございます。

報告にはいくつかありましたよね。琵琶湖をきれいにしたい、競技人口を増やしたい、湖上スポーツにはヨットもボートもカヌーもあるから身近に体験できるようにしたい…。特に先生たちもやったことがないから、先生や親の世代も参加できるようにしたらどうだとか、観光とセットで魅力を発信するなど、いいアイデアですよ。

県でいろんな取組をする時に、皆さんが体験して考えて提言してくれたことを活かしていきたいなと思います。これからの皆さんの人生にとって今年の体験が活きますようにお祈りしまして、私の講評にさせていただきます。ありがとうございました。



知事による講評



講評を聞く委員たち

## ◎解団式

### 1. 認定書授与

解団式では、三日月知事より「国体フレンド\*」認定書が授与された。

\*国体フレンドとは、今後の大会準備に関連する活動への参画など、大会サポーターとして関わりを継続してもらうことを期待して認定。

2024年には国体の総合開会式に招待する予定。



認定書の授与

### 2. 委員代表者あいさつ 中学2年 高木 瑞希さん

私がこの活動に参加したきっかけは、生徒会からの委員募集でした。国体がどういふものかも知らなくて、ただ活動に参加すれば、今後の生徒会活動に役立つかなという思いで参加しました。

印象に残っているのは、やはり湖上スポーツの調査・体験活動です。選手や指導者の方々にインタビューをしたり、実際に操作方法を教えてもらったり、活動を重ねていく中で次第に湖上スポーツの魅力に引き込まれていきました。また、ジュニア・ユースチームのみんなと一緒に体験することで、メンバーとの交流も深めていくことができました。後半の活動は話合いが中心に行われたのですが、普段私は生徒会に所属しながら、なかなか積極的に発言できていなかったもので、話合いの活動では自分から意見を出すことを目標に取り組みました。

多くの方々からお話を聞いていると、滋賀のスポーツ環境の良い所や改善点が見えてきて、「もっとこうした方がいいのではないか」「こういう工夫をすればもっと良



くなるかも」という思いが浮かんできました。今回の活動ではそれを自分の言葉にして、たくさんの意見を出すことができたと思っています。そして、活動を通して自分の新たな一面を見つけられたように思います。

ジュニア・ユースチームの活動に参加しようと思った時、部活との両立が不安で迷った部分もありましたが、今回私は参加して良かったと思っています。どの活動もやりがいがあって、何より楽しかったです。

国体が滋賀で開催される年、私は24歳で、同じ年齢の人で活躍する人もたくさんいると思います。今後、機会があれば、9年後の国体を陰で支える活動に参加してみたいなと思いました。私たちは今日で活動を終わりますが、メンバーそれぞれが今回の活動で得たものを糧に頑張ります。

最後に一緒に活動してくれたメンバー、お世話になった方々本当にありがとうございました。



委員代表者のあいさつ

## さいごに

発表した提言の中には実現の可能性が高いものから実現の難しそうなものまで様々な意見があったが、少しでも湖上スポーツの活性化に役立ってくれればと思う。

このような貴重な活動に参加させてもらい、とても充実した時間を過ごすことができた。再びこのメンバーで集まり、9年後の国体に向けて協力できればと思う。

ジュニア・ユースチームの活動に御協力いただいた関係者の皆さん、本当にありがとうございました。

### <ジュニア・ユースチーム 第1期生メンバー>

No.	氏名	学年
1	安部 裕嘉	小学 6年
2	石原 龍生	〃 6年
3	田中 夏稀	〃 5年
4	福原 明日香	〃 6年
5	藪野 響	〃 5年
6	山本 菜々実	〃 5年
7	石原 夕月香	中学 2年
8	高木 瑞希	〃 2年
9	田中 凌	〃 3年
10	長谷川 稜	〃 1年
11	丸尾 秀幸	〃 2年
12	村松 恵実	〃 2年

No.	氏名	学年
13	池口 慎人	高校 1年
14	関口 耕大	〃 2年
15	坂 涼介	〃 3年
16	馬場 莉子	〃 1年
17	増井 和真	〃 1年
18	大崎 智彦	大学 2年
19	橋詰 真実	〃 2年
20	福見 拓馬	〃 4年
21	二林 佳奈子	〃 3年
22	寶関 千裕	〃 4年
23	水谷 貴一	〃 3年

